

令和7年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要

目的・目標

- 高等学校内の特別支援学校高等部分校で行われるインクルーシブな学校運営や「交流及び共同学習」の全県的カリキュラムの作成。
- 現在実施されている「交流及び共同学習」と学校運営システムの検証と改善。
- 両校が共に学んだインクルーシブ教育を卒業後の地域社会のインクルージョンに発展させる。

学校運営
連携校

静岡県立沼津特別支援学校伊豆田方分校
(対象:知的障害)
静岡県立田方農業高等学校

一体型

カリキュラム・
マネージャー

元静岡県教育委員会特別支援教育課長

事業1年次の
取組概要、
成果・課題

実施校の、田方農業高校に設置されたライフデザイン科のセラピーコースでは、科目「生物活用」の実験実習の一つの柱として、校内に併設する沼津特別支援学校伊豆田方分校生徒との学習活動を行っています。実施校の取り組み改善を基に、全県的なカリキュラムの作成を研究しました。実施両校が共に学んだインクルーシブ教育を卒業後の地域社会のインクルージョンに発展させるための体制、コミュニティースクールの在り方等も検討しています。共通教科における「交流及び共同学習」の在り方が課題となっています。

取組概要(事業2年次)

現在、静岡県内の高等学校内に特別支援学校高等部分校(知的)が12校設置されていますが、「交流及び共同学習」は、それぞれの学校に委ねられており、全県的なインクルーシブな学校運営は、なされていません。

本事業は、実施校の取り組み改善を基に、高等学校内の特別支援学校高等部分校で行われるインクルーシブな学校運営や「交流及び共同学習」の全県的なカリキュラムの作成し、実施校で行われている「交流及び共同学習」と学校運営システムの検証と改善を行う事を目的としています。

本年度は、すべての授業において多様な生徒に対応できる授業づくりの在り方を踏まえて、「交流及び共同学習」を発展させました。

高校、ライフデザイン科と特別支援学校園芸班の「交流及び共同学習」(農業教科「生物活用」)では、今まで高校と特支が異なるワークシートを使用していましたが、同一のワークシートを作成し、同じシートで生徒同士が話し合いをすることで共同学習を整理しました。

また、「学んだことを他者に伝える。」学習活動を互いに伝えあう、から地域に伝えるに進化させた、「伊豆仁田駅花いっぱいプロジェクト」に取り組み、「交流及び共同学習」を地域連携に発展させました。

併せて、振り返りシートを活用し、学びの振り返りを行いました。これらのシートは回収し、両校の教員が学習の状況を把握するといった取り組みです。

また、「交流及び共同学習」の実施を動物科学科の「生物活用」においても実施しました。

合わせて、実施両校が共に学んだインクルーシブ教育を卒業後の地域社会のインクルージョンに発展させるための体制、コミュニティースクールの在り方等も検討しています。令和7年度の第2回運営協議会を田方農業高校と伊豆田方分校は、合同で開催し、本事業の一年目の取り組みを説明するとともに、インクルーシブを進めるための両校のシステムについて意見交換を行いました。

①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

ライフデザイン科セラピーコースの2年生及び3年生生徒と、分校の作業学習の各班生徒との交流授業。分校の作業学習作業班は、園芸班、陶芸班、清掃班、木工班の4班が編制されて、園芸についてはより専門的に学習している田方農業高校の生徒が、陶芸・清掃・木工については、作業学習で取り組んでいる分校の生徒が、それぞれ中心となって学習を展開しています。教育課程上、セラピーコースの生徒は農業科目「生物活用」、分校の生徒は「作業学習」の授業であり、学習内容や活動を分かりやすく説明することで、日ごろの学習の実践の場となっています。

本年度は、昨年度の外部専門家の助言も踏まえた、「交流及び共同学習」の検証の上に、二つの新たな取り組みを行いました。

一つは、両校の学びのベクトル合わせです。今までは、園芸活動の成果を卒業式を飾る花のコンテナとしていましたが、両校の生徒が利用する駅舎を花で飾る地域連携活動としました。二つ目は、普通の高校授業、科目「野菜」に分校の生徒が参加する取り組みです。これらによってカリキュラムの統合を研究しました。



②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

新たなインクルーシブな学校運営体制の在り方を検討するため、高校と高等養護学校の併置、校長の兼務を実践している兵庫県、知的障がいを持つ生徒の高校入学制度を実施している神奈川県を参考に研究を行いました。

静岡県には設置されていない高等特別支援学校の実践は、作業学習あるいは職業教科(専門科目)による指導など、特別支援学校高等部の教育課程の在り方を考える参考となりました。

また、これらを他の高校内に設置されている特別支援学校分校・分教室連絡協議会や県立学校校長会等で発表し、本事業の報告と啓発を行いました。(写真は、公開授業の様子)



田方農業高校・伊豆田方分校両校の学校運営協議会で、地域でのインクルーシブ教育の在り方についての熟議を深めました。

本事業の成果（事業2年次）

田方農業高等学校セラピーコースと伊豆田方分校の活動は、農高2年生の、園芸の知識・技術を特支（分校）の生徒に伝え、一緒に園芸活動と農高3年生の活動は立場を変えて、特支（分校）の生徒が、作業学習の内容を農高生に伝え、作業学習を体験する二つの取り組みがなされています。伊豆田方分校は、作業学習に位置づけ、共同学習の側面が強いことがわかりました。特別活動や学校行事ではなく、互いの授業の中で「交流及び共同学習」を実施しているため、活動の事前や事後に両校の担当同士で打ち合わせを行っています。そのことによって生徒の実情に即したグループ分け等、きめ細やかな配慮が可能となっていることがわかりました。

今年度は、学習目的を両校の生徒が利用する駅舎にする事によって、授業の方向性を重ねました。加えて、共通のプリントや振り返りシートを使い、互いの生徒がどれだけ伸びているか、授業の目的が達成できたかを教師が確認する取り組みを行いました。

学校運営モデルの構築は、互いの学校教育目標を如何に重ねることが重要であることがわかりました。二つの学校が一つの教育目標に向けて教育活動を実施するには、教職員や学校文化がインクルーシブであることが大切であることがわかりました。

前年度からの 変化・改善点

- ・両校教員が、それぞれの授業公開や研究授業の際に積極的に参加し、授業の内容や指導法など具体的に知ることができた。
- ・両校の学校運営協議会の第2回を合同で実施した。それぞれの学校の展望や課題を両校の委員によって協議することができた。
- ・支援が必要な生徒の学習評価の在り方や「教科等を合わせた指導」の目標の理解の難しさが多く出された。

課題

今後の展望

ライフデザイン科セラピーコースと特支（分校）との活動に関しては、交流から共同学習への移行、授業のねらい、評価等を両校ですり合わせる必要があります。特に、特支（分校）と農高各学科の活動は、「交流」が目的ではなく、相互に目指す生徒像を定め手段とする必要があります。交流学習は、それぞれの学校での学びの成果を伝達する（確認する）場として、高校生が分校生に伝える、分校生が高校生に伝える場を設定しています。交流授業の教育課程上の位置づけは、高等学校は主に「生物活用」と「総合実習」であり、分校は「作業学習」と「総合的な探究の時間」です。教育課程上の位置づけと目標の設定について、さらに整理が必要です。

実施校（農業高校）の「交流及び共同学習」を他の特別支援学校分校でも実施可能な普遍性のあるシステムにする必要があります。次年度は、県内の他の分校でも試行を行い、取り組みの成果を全県で共有します。

「交流及び共同学習」のための時間ではなく、高校の通常の授業に（単元単位で）特支（分校）の生徒が参加する方策について研究を進めます。単発の「交流及び共同学習」に関しては、より良い目標達成のため構成的グループエンカウンターの手法導入を研究し、両校の「交流及び共同学習」の教育課程上の位置づけを明確にします。